

## 【症例パトリア】 [女児 年齢:治療開始時10歳5ヶ月]

於・St.George's Hospital, Dept.of Child Psychiatry, Clare House  
Blackshaw Road, London. SW17, ENGLAND

・主 訴; 抑うつ症状。無気力。声を失うなど感覚麻痺あり。

(5歳頃、母親が父親に殺害され、一時に両親共奪われるという心的外傷がある。)

・家族背景; イギリス連邦加盟国のひとつ、ジャマイカからの移民。パトリアの下に弟リロイと二人の双子の妹がいる。地方福祉局で要保護児童とされ、父親の実姉である伯母 (Mrs.P) が里親 foster-mother として彼らの養育に当たってきた。諸々の手当てが公的に支給されている。そこに、刑務所で服役していた父親が1977年1月に釈放され戻ってきた。しばらく伯母夫婦宅に居候。だが彼らとも子どもらとも折り合いが付かず、やがて彼は家を出てゆく。子どもたちは元通り伯母を里親として暮らすことに。将来家族一緒にジャマイカに帰国する予定。ジャマイカ生まれの父親は13番目の子どもで末っ子。Mrs.P は彼の年長の姉。彼らの親族はバーミンガムやブライトンなど英国国内のあちこちにて、互いに交流がある。[尚、リロイはチックなどの問題症状があるため、パトリアと並行して治療が実施された。]

### ■資料その1:パトリアの治療経過についてのレポート (日付;1976年4月21日)

パトリアの治療は、1975年12月3日に彼女の伯母 Mrs.P の要請で開始されました。その最初の何週間の間、わたしを「自分のお世話してくれる特別な誰か」、つまりゴッドマザー(名付け親)みたいなものとして大いに期待するところがあったようで、わたしからもらえるもの(物質的な何か)をあれこれ想像たくましく思い廻らせるのでした。セッションに来る度に何かしらプレゼントがもらえて、それにお茶やらビスケットやらのもてなしがあると思ったり…。やがて事態はそのようではないということが分かり、困惑したり幻滅したりと、自分の気持ちを落ち着かせるのにちょっと手間取ったふうでした。(特にやはりクリスマススの時期がそうでした。)

彼女が突然両親共に失ったという「喪」の時期をどのように凌いだかということですが、そこには彼女の内側に秘密裏に悪意ある願望があったのです。すなわち両親を引き離し、それでお父さんを自分一人だけのものにするということ、それに彼女がひどく嫉妬していた母親、つまりは‘悪いお母さん’に報復するといったことでもあります。かつて母親は、パトリアが父親の膝の上にいると厭味を言うことがあったり、下の子どもらを鼻厘して、彼女には何かというと邪険でつく当たると感じておりましたし、母親がいつか彼女を見捨てるに違いないと思っていたのです。そもそも金を貯めていつか他の男と駆け落ちしようと母親が目論んでいたのを盗み聞きし、父親に告げ口したのは彼女であり、事件の発端もそれでしたから、彼女としてはすべて自分のせいだと自分を咎める気分は当然あったわけです。でも、母親は父親の肌の色が黒いのを嫌がり、ナイフをちらつかせて彼を挑発するなど、諍いは日常茶飯事で、夫婦仲は陰悪だったわけです。パトリアは、母親と父親が決して出会わなかったとしたら、決して結婚

もしなかったとしたら、彼らはどこかで幸せに暮らしているだろうし、おそらくそれぞれ別の誰かと結婚して  
るかも知れないと空想してみたりするのです。それからふと、じゃあ今のこの自分は一体何者かというこ  
とになります。それでひどく困惑するわけです。そして、そもそも自分などは産まれてこなければ良かった  
のだというふうに思うのです。彼女は宙を見据えたまま、じっと身動き一つせず、茫然自失したまま、そ  
んなふう<sup>さまよ</sup>に心の中で自分を殺してしまっていたといえましょう。彼女は‘死んだ霊’として、どこに行く当て  
もなく、ただ宙を彷徨っていると感じるのです。

彼女は誰か新しいお母さん、彼女をもう一度産んでくれる誰かを求めていたのです。そしてより現実的  
な意味合いでは、彼女がしっかりと掴んで離れずにいられる誰かであります。それは象徴的には「母親  
オツパイ (feeding breast)」といったものでしょう。でもわたし (Miss Yamagami) は週一回50分だけし  
か彼女と一緒にいることはできませんし、それ以上には決してならないことに彼女は失望しておりました。  
彼女はわたしに対して怒りと敵対心を露わにするようになり、わたしが彼女のことをどれほど気にしてく  
れているものやらと疑心暗鬼となってゆきました。彼女の抵抗感やら不信感が徐々に彼女の心の表  
面に浮かび始めますと、彼女はわたしを死んだ母親みたいな、「悪意ある邪悪な霊」として見做すよう  
になります。(殊に、わたしが小柄で黒髪で皮膚の色が母親のそれと似ているといったことで、わたしは  
亡くなった母親にそっくりだというのが彼女の第一印象であったようで、そのように転移を募らせていった  
わけです。) 残忍で、敵意に溢れ、ずる賢く、いろんな策略を使って彼女を貶めること、そして故意にト  
ラブルに巻き込むとか、彼女の耳に何やら邪悪な呪いのことばを囁くといったことをするわけです。例え  
ば<おまえは頭がいかれている>とか<アバズレ！>とか…。

彼女はセッションの中で彼女に提供されるところのすべて、玩具類などを拒絶しました。彼女は彼女  
専用の箱の蓋を開けようともいたしません。なぜならば、わたし (Miss Yamagami) は或種の魔女であ  
り、汚れた毒のある食べ物を彼女の口に押し込もうとするからです。そうしたセッション用に準備された  
ものの代わりに、彼女はお菓子を持参し、それをセッション中に口にに入れることをします。これはつまりの  
ところ、飽くまでも‘自給自足’であろうとすることに著しい特徴が見られます。だから誰にもかまって欲  
しくないというわけです。パトリシアは近々父親が刑務所から釈放されるということを聞いております。そ  
れは彼女にとって病院でのわたしと一緒に治療の終わりを意味します。なぜなら彼らは遅かれ早かれ  
この国を去り、ジャマイカに帰国する予定でいるからです。わたし (Miss Yamagami) は、母親がそうで  
あったように、彼女のもとから逃げ去り、永久に彼女を見捨てるといった空想は、彼女にとってあまりに  
もリアルに思えたのです。母親はかつて、彼女にポテトチップスやら他の何かのお菓子の袋を与えただ  
けで彼女を置き去りにして、日中いなくなってしまうことがありましたから、そこでもはや存在しない母親  
とか、簡単にすぐいなくなったりする母親を恋い慕う或は何かしら要求するなどといったことをせず、むしろ  
彼女が今手許にあるところの菓子袋で満足するようにと自らに敢えて強いるわけであります。言い  
換えれば、彼女の空想上では、お菓子は、実際のところ「母親オツパイ」とも違って、口のなかでかみ  
砕き、飲み込んだりできるわけですし、それで自在に彼女の内側でそれらは確保されるといったわけ  
であります。

それに加えて、そうした口唇愛的サディズムは、彼女の燃えるような自慰的興奮において、‘父親と性交中の母親’を炎上させ、その揚げ句に「灰と骨」に成り果てさせるといったことになるわけです。そうありますから、母親と父親がたとえどんなにいい親たちでそしてどんなに彼女をやさしく気遣う親たちであったとしても、パトリアのころのなかではどんな意味でも生き残れるはずはなかったでしょう。彼女は己自身の破壊的衝動をひどく恐れておりました。それに伴い、彼女自身の内側で自らが為したと思ひ込んだところのものに対しての甚大な罪意識がありました。彼女はそのせいで、厳罰に処されること、もしくは‘報復’といったことを恐れることとなります。そして象徴的に彼女は自分を殺すことで、自己アイデンティティーを失い、そして自分が誰なのか分からないといったことになってしまうのです。こうした心的状態で、彼女は孤立無援であり、まったくのところ独りぼっちです。そして自分というものがまるで掴みどころのないものになってゆくわけなのでした。彼女が母親の死について自らの痛みやら悲しみに触れるようになってくるのには随分と時間が掛かりました。そして、それはこれからもそうでしょう。彼女はごく最近になってようやく母親が真正の愛情をもった‘いい’母親であったということも考えられるようになり、母親が遺した衣類のなかから貰ったカーディガンを着てセッションに来ることもありました。父親が母親を刺し殺したことについても、以前とも違う、より現実的な見方をするようになっていきます。

しかしながら、セッションにお休みが来ますと、彼女が心の内側にわたし(Miss Yamagami)の‘いい母親の部分’を維持できるかどうか大いに試されることとなります。すなわち、彼女の成長を見守り、援助の手を惜しまない、そうした母親との繋がりに絶えず触れていられるかどうか、それともそれとは関係なしに、防衛として自分一人だけの殻のなかに閉じこもるといった退行を余儀なくされるか、どちらかかといったことになりましょう。

Chizuko Yamagami  
(Child Psychotherapist)

\*\*\*\*\*

## ■参考資料その2;パトリアの治療経過についてのレポート (日付;1977年2月2日)

パトリアについてもっとも難しい点は彼女がその心のなかに良き助けとなり、支援してくれる誰かを維持する・抱えもつことが出来ないということです。これは疑いもなく、彼女の外的状況において、実際のところ両親が不在であったということに由ると考えられます。彼らは実際のところ彼女のニーズに応えることが出来なかったのであります。父親はごく最近刑務所から釈放されております。彼は妻を刺し殺し実刑判決を受けて服役していたわけです。その間パトリアが彼に面会するということが時折あったにしても、ごく限られていたわけです。それ以上に肝腎と思われ<sup>じ</sup>ますことは、こうした不在で何も与えてくれない両親に対して、彼女の‘怒り狂った焦れた赤ん坊’の部分が彼らにひどい仕返しをし、またそれのお返しとして彼らが彼女に対して敵対的で、意地悪で、悪意を孕むものとなっていったということだろうと思われ<sup>じ</sup>ます。彼らが愛すべき、思いやりを尽くしてくれる良き親であるかどうか、そして彼女が彼らに

とって必要とされる子どもであるのかということが始終大いに問題になるわけであります。これらのストレスが、彼女の未成熟な感情面と相俟って、いよいよ思春期に近付こうとしているこの時期にいっそう増強されたといつていいでしょう。

彼女の‘良き母親’を独り占めにしたい、他の誰をも(父親そして他の子どもたち)ぜんぶ排除したいといった幼稚な願望は、現在尚もとても強いと思われる。殊に彼女が父親を母親に対して暴力的でかつ損傷を与えるものであると見做す以上、彼女としては彼らを永久に離れ離れにしておかねばならないと思うわけです。それは母親の安全のために、そして彼女自身の生存のためにもであります。少なくとも彼女にとって「母親オツパイ」は絶対になくしてはならないのですから。彼女が描いた絵に「壊れたテレビ」があります。それは大きな鋭い鋏が突き刺さったせいなのです(図例; 1976/12/20)。これは彼女がわたしを、わたしが不在の間に、誰かと一緒にいて(わたしの‘夫’なるひと)、それでわたしの身に起きることとして彼女がそのようにわたしを思い描いていたということがわかるのです。一方で、彼女は良き思いやりのある父親を自分の一人だけのものとして占有したいということがあります。母親に対して張り合う気持ちは強く、それで嫉妬深く敵対的な母親によって迫害されているといった気持ちになるわけです。それでついには見捨てられると脅かされることにもなります。彼女はしばしばわたしについても同様なふうに感じるようであります。特に今では現実に父親を取り戻したということもありますから・・・



彼女は今や思春期を迎えました。生理が始まったとき自分のからだにどんなことが起こるか、彼女にしてみると随分と気掛かりなものでした。伯母さんからの適切な情報とは別に、彼女の空想はその怖れをいっそうのこと募らせるものでありました。彼女は自分のからだの内側が血塗れた‘ゴミダメ’になるという考えに怯えていたのです。空想レベルでは、彼女は‘良き母親’の性器及び子宮を、‘良き父親’の子を受け取る生殖のペニスでもって、たくさんの愛すべき子どもらによって充たされるといった具合に、それらが修復されるものと必死になって取り組んでいたようなのです。しかしながら、彼女は‘父親ペニス’が信頼に値するものかどうか今ひとつ安心がないわけです。それに彼女が母親の安寧を願うにしても、パトリシアに対しての愛情深い母親になってくれるものかどうか怪しんでいたわけですし、それに彼女自身の母親に対しての嫉妬心および鬱憤がありました。ですから彼女にとって、どうせ‘ゴミ箱でしかない母親’、そしてその中には‘使い捨てにされた役に立たないペンといった父親ペニス’といったイメージしか思い浮かびません。まったくのところ、どうしようもなく役立たずで薄汚れた「結合両親像 combined parental figures」なわけです。それも彼女の自己イメージを反映しているといえましょう。つまりのところ、自分が不要なもの、厄介なもの、もしくは薄汚れた、意地汚いだけの‘子豚’もしくはただの‘ウンチ’といったことであります。わたしが彼女から永久に立ち去りはしないかとの思いが募ると、彼女はセッション中に持参したお菓子袋から菓子(ピーナッツ類)を貪り食うことに耽溺しました。それは恰も自分のなかには大きな、何もない虚ろな穴だけがあって、それを何が何でも埋めなくては、崩壊してしまうといったことのようにあります。

パトリアがわたしとのセッションを継続するにあたり、時には授業を抜けなくてはならないこともあり、学校の校長先生の Mr.Car 及び担任の男性教師 Mr.Parker からの支援は不可欠でありました。彼らとの関係のなかで「父親転移」が繰り返されるなかで、それらとの重なるなかで、やがて徐々に‘良い父親像’の記憶が蘇ります。例えば、幼少時に玩具を壊したときなど、<大丈夫、直してやるから・・・>と父親が言ってくれたとか・・・。困みに彼の職業は大工であります。こうした「修復する父親ペニス reparative penis」の象徴として興味深いのは、車が壊れたから近くのペトロステーションに持ってゆくといい話やら、それに農場主が水場に子豚たちを連れてゆき、水浴させて戻ってきて、そして豚舎を綺麗に清掃するといった話です(1976/05/24)。それから、水槽の金魚は汚れた水の中では生きられないから、水を換えてあげなくてはいけないといったこと(1977/01/04)もそうです。セッション中でも箱の中を<整理整頓(tidy up)しなくちゃね・・・>とよく言うようになりました。何がほんとうに大事か必要か、あれこれ吟味をし始めたのです。そのいい例が彼女の描いた「農場で必要とされるものたち(all these things are needed in a farm)」の図であります(図例; 1977/01/26)。こうして‘大切にすること’、そして‘大切にされること’へ向けて意欲するようになってきたといえましょう。



母親の死以後、彼女がずっと凌いできた過酷な状況にもかかわらず、それでも尚、彼女のなかに、良き対象を求めようと意欲すること、そして自立してゆこうとする気概が感じられ、わたしとしてはパトリアと一緒にこれからもセッションを継続してゆく価値があり、かつやりがいがあると感じております。

Chizuko Yamagami

\*\*\*\*\*

■資料その3;パトリア親子について福祉局の報告書 (日付;1977年7月13日)

[※註;これはパトリア及びその弟妹を担当する地方福祉局のソーシャルワーカーから「Inner London Probation & After Care Service」宛ての書簡である。パトリアがわたしとの治療を進めている間に家族背景として何が起きていたのかを知る資料としても興味深く思われるのでここに掲載する。尚、文書中の個人名は伏せ字となっている。]

Dear Mrs.C\*\*

先週電話でご連絡いたしました、S\*\*B\*\*(註;パトリアの父親)の件でご連絡申し上げます。現在の状況について幾つかお知らせ致したいことがございますので。

わたしはこのP家の家族とは過去数年に亘って関わりを得ておりまして、おそらくMr. Bが何らかの問題に遭遇するものと推察されましたので、予めA. Cameronを訪ね、論議いたしてまいりました。殊にMrs. P(註;パトリアの伯母。父親の実姉)は弟について非常に憤りを抱いております。その鬱憤の捌け口として、彼が罪を犯して以降、子どもたちの里親として特別手当を含んだ、かなりの額が支給されておりますのに、さらにわが福祉局を頻繁に訪れ、事ある毎に増額を訴えてまいりました。その欲張りなこと！彼女を満足させることなどともあり得ないといったふうで、要求はとことん底無しであります。そのようにして彼女はMr. Bに対する怒りをぶちまけているといったところです。彼が今年1月に出所して以来子どもたちの養育は彼の責任下に置かれることになったわけですが、わたしとしては、そのことがますます彼女のMr. Bに対する怒りを増幅させてゆくのではないかという懸念を抱いております。

それに付け加えまして、P家の人びとがこれまで長い年月子どもたちの世話をしてきたわけですから、おそらくP家とMr. Bとの間に、子どもたちを巡って誰が彼らに責任があるのか、最終的な権限を持つのは誰なのかを巡って反目し合うことになるのではないかと、わたしは恐れておりました。これらの困難に対応するにあたり、どちらの側にもそれなりの心積もりをしてまいりましたが、互いにも非現実的(unrealistic)に振る舞うことが多いように見受けられます。どうやらこの家族にかかわったわれわれ全員が、彼らそれぞれの傾向として、己の感情を否認するといった問題がある点を些か甘み見ていたのではなからうかと思われてなりません。

彼が刑務所で服役していた間、長女のパトリアは公然と父親に対しての愛情を語っております。それも、彼が母親を殺してくれて良かったとまで言っております。わたしは、彼女の本当の気持ちを否認するニーズというものをここに察知いたします(彼に対する恐怖のゆえなのでしょうか?)。それが、彼女をそして他の家族メンバーもまた、彼が戻ってきて彼らと実際に暮らすときに生じるであろう問題を吟味することを妨げていたように思われます。最初から、Mr. Bはそうした雰囲気にも共謀もしくは加担しているふうでありました。そもそも彼が己の罪過を認めるのは不承不承であり、どちらかという咎を妻に負わせるといったふうなのです。こうした態度である限り、彼らの間に起こり得る緊張は避けられないはずなのですが、それに対処することが妨げられているように思われます。Mrs. Pとしては、己の身に起きた理不尽なことについて感じることを声にするのを妨げられている、なぜならそれはMr. Bに罪悪感を抱かせるからであり、しかもその誰かさんのせいで物質的にかなりの苦勞を強いられているのに、その誰かさんが今度は彼女が感じるところを彼に都合よくあれこれ指図してくるといったことにもはや我慢がならないといったところでもあります。そこで彼女は、今度は彼に自分の将来をどうすればいいのかを指図することを強く主張し始めたわけでもあります。これは家族のそれぞれのメンバーの間で起こり、ついにはすべての者がMr. Bに対して反感を抱くようになり、拳句に彼は‘人食い鬼 ogre’呼ばわりされるといったふうで、これまたいかにも非現実的(unrealistic)と言わざるを得ない事態に至っております。これはまったく堂々巡りで解決の糸口が見つけられませんが、わたしがこれまでに試みた如何なる介入も

成功しておりません。Mr. Bであろうと誰であろうとこうした事態に対処することは難しいでしょう。Mrs. Pは彼に折々に長々とお説教をするわけですが、それはわたしども福祉局を訪ねた際に彼女がそうであるように、経済的逼迫についての苦情が主です。わたしは先週こうした状況に直面したわけですが、Mr. Bはパトリアと呼びつけ、自分に味方するように促しました。わたしの率直な印象を申しますと、彼は彼女を自分にとって都合のいい「良い妻」といった型に嵌めようとしているように思えます。しかし彼女は当然のことながら伯母さんのほうに味方したわけです。この時点で彼は怒り狂い、彼女を両手で掴んで、ホールから彼女を引き摺り落とそうとしました。わたしは彼女から手を離すようにと彼らの間に割って入ることをせざるをえなかった次第です。

後にわたしが彼と話しました折、彼はパトリアが亡くなった妻そっくりだということ、もはや彼女を信用できないと語りました。わたしがこうした事態においてどんなに不安を覚えたか語る必要もないでしょう。彼が彼女を自分の妻そっくりだといったこと、しかも彼自身は彼女への想いを否認していることから、怒りはいっそう募っていると感じられました。事実わたしはそれを目の当たりにしたわけです。疑いもなく、わたしのころのうちでは、彼がこうした状況に留まる限り、いずれ何かしらとんでもないことが起こりうるといったことはあるのではなかろうかと思われました。そしてごく最近のこと、どうやら彼がP家を出て、近くに住まいを移したということを聞くに及んで安堵しておるところです。彼らが手の届くところにお互いがいる以上、どのような問題が生じるか分かったものではないというふうに思われます。わたしとしては、彼が家族の身近に居続けることは良いことに思えるのです。子どもたちが今や彼に対抗しているといったこともあり、彼らがこの事態をどうにか対処してゆくことが出来るようになることを期待したいのです。今や彼は幾らか距離があり、従ってそれほど怖がらなくてもいい存在になっているとも言えます。それでお互いにもっとより現実的(more realistic)に事を構えられるといったことが期待されましよう。

わたしはこうして長々と実際に目の当たりにした現場について書き綴りました。この家族の当事者それぞれの誰についてもわたくしは一樣に懸念を抱いております。これでMr. Bが罪悪感を一掃し、むしろ子どもたちについて良からぬ空想を膨らませ、彼らとの関係性をいっそう面倒なもの、かつ陰悪なものにしてゆきはしないかと、それは今すぐにといいことではないとしても、危惧されるのであります。Mr. BはP家の住まいから去ったわけですから、われわれは子どもたちを再びケアに戻すということが妥当と考えております。従ってMrs. Pに里親として手当てが支給されることとなります。これは少なくとも彼女の怒りを幾らか和らげることでありましよう。そして彼女が貰う手当てはおそらくMr. Bが工面し彼女に子どもらの生活費として手渡すよりはずっと多いはずですから、結局のところ、こうして事態に一応解決策が試みられたことは取り敢えず良かったといわねばなりませんでしょう。

以上。あれこれとりとめのない報告書になりましたけれども、よろしくご判読ください。少しでもお役に立てればと思います。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

敬具

D. L\*\*\*\*  
Social Worker

[※補記;パトリシアの証言から、上記の文面中に言及されていない或る重要な事実が一つあります。実は、Mr.&Mrs.P が旅行で留守していた間に、父親がガールフレンドのアイランド系白人女性を家に連れ込んでいたことが発覚し、それが問題として彼は糾弾されたのであります。パトリシアが伯母夫婦に告げ口したと彼は激昂し、彼女を叩き、彼女は彼を<嘘つき(liar)！>と罵り、それで彼は彼女に襲い掛かったというわけで、それをソーシャルワーカーが割って入り止めたということなのです。そして、こういう事態に至った以上、もはや家を出てゆくしかなかろうと示唆され、父親はその勧告を不承不承飲まざるを得なかったのであります。]

\*\*\*\*\*

#### ■資料その4;パトリシアの治療経過の総括レポート (日付;1979年9月30日)

1977年の1月以降、彼女の父親が刑務所から出所して戻ってからというもの、彼との間で過去に培った強固な愛着がぶり返ったかのようでありました。いうなれば「お父さんの小さな奥さんDaddy's little wife」というわけです。しかしながらそれも徐々に幻滅を抱くことになり、彼への信頼も失われてゆきました。そうした一連の経過は、実に胸が張り裂けるような出来事の連続でありました。そうした思いは、彼女が粘土で「ネズミの家族」についての物語を語った折に、そこに鮮やかにありありとあらわれております。ネズミのお父さんは帰宅するはずの時間に大幅に遅れており戻ってきません。そしてネズミのお母さんとその娘はひどく心配をしております。もしや車に轢かれたのではないか、それで病院に搬送されているのではないかといったことを思い、ひどく気を揉んでいたのです。父親が自分たちを見捨てたのだなど考えることはとても耐えられません。それで究極のところ、彼女はその粘土のネズミのお母さんとその娘をばらばらに切り裂いてしまうのです(1977/05/06)。

父親は家を出てゆきました(1977/07/08)。彼女は、父親に今や‘愛されてない’と感じたことで味わった失意の思いを学校での男の子との浮つきたいちゃつき・戯れに切り換えます。彼女は男の子の間では自分が人気者だということを証明せんとして、随分と無理して背伸びをします。攻撃的ですからあります。セッションのなかで彼女はたくさんの「相関図(a coupling chart)」をつくります。つまりどの男の子の誰さんがどの女の子の誰さんを好きだといったふうに。。。。恰も学校中の男の子と女の子の間で誰が誰を好きだといったことふうにそれぞれペアづくりを企て、彼女は事態を仕切ろうとしたわけです。それで誰もが競争心そして嫉妬心で争わずともいいように、そしてまたパトリシアにも誰か一人男の子が与えられるといったことにもなります。

しかしながら、彼女の‘ボーイフレンド’に対する気持ちは揺れ動きます。彼を信用していいかどうかというと実に怪しいわけで、事実わたしが見ていてあらっと思ったのは、彼女のチャートでは彼女のボーイフ

レンドの名前がごく頻りに別の誰かに変わっているのです。そして男の子と関係が切れた場合のエピソードからして、結局のところパトリシアは彼らに対して否定的、懐疑的、そして敵対的にすらなりがちでした。彼女はこんなことを語ってます。〈わたしたちって、幼い頃には何かというとオモチャ、オモチャ、オモチャなのよね。でも今や大きくなってみると、男の子、男の子、男の子ってわけ・・でも男の子って玩具おもちゃじゃないでしょ。人間だもの。何だか男の子って、とても面倒くさいわ They are hard・・・〉(1977/11/11)。そこには興奮と落胆とが混じっておりました。そして或る時セッションに来る途中でのこと、路上でたまたま男の子が彼女に向かって何か悪態を付いたということで彼と殴り合いをしたみたいです(1978/04/28)。以前、〈蹴られたら蹴り返す。そうじゃないと「弱っちいやつ」とナメラレルから・・〉と言ってましたが、まあ、そういうことなのでしょう。この時期、セラピーのセッションではパトリシアは感情を抑えこんで鬱々とした感じで、不機嫌そうでもあり、そしてセッションに通ってくることに抵抗を示しました。それは明らかに、(転移上)‘懲罰的でしかも嫉妬深い母親’としてのわたし(Miss Yamagami)に悪い子だと叱り付けられることが怖かったということだと思われます。彼女は自分が男の子の気を引くことができるということを意識すればするほど、死んだ母親の権利、その彼女の若やいだ美そして魅力を自分が奪ったということを確信するかのように見受けられました。実際のところパトリシアは、恰も彼女の日記を覗き見してプライベートであるはずの彼女の性的な感情を見咎めるといったような母親としてわたしを警戒していたように思われます。そうしたことがもしも発覚したならばやばいことだと思われたのです。彼女はわたしから受けるどのような影響からも逃れなくてはならないのです。しかし同時に彼女は思春期の始まりといった極めて重要で危機的な時期にあったわけです。事実‘コンテナーとしての母親’をどれだけ希求したか知れないのであります。それは彼女の語った夢にとっても感動的に表れていると思われます(1978/04/28)。夢の一つ；一つの大きな箱がありました。その箱の中にはたくさん小さなサイズの箱が入れ子状に詰まっておりました。穴を見つけて彼女がそこに潜ってゆきますと、彼女はその一番底に降ります(おそらく一番小さい箱と思われます)。そして初めて彼女は安堵するといったものです。夢の2つ目；彼女は人影もない荒れ果てた地にいます。そこに槍を手に彼女を追う現地部の男たちが現れ、彼女を追いかけます。その追跡から逃れるために彼女は一目散に駆けておりました。そして大きな家のなかにか逃げ込むのに成功します。どういうわけか、彼女はそこには「四角いもの square」があるはずだということを知っていたのです。そしてこれら夢をわたしに語ったすぐ後に、彼女はふいと部屋を見回しました。すると、実に彼女は、わたしと一緒に「四角いもの square」、つまりはわたしたちのいつもの部屋の中にいたというわけです！

1978年の7月の初め、パトリシアに生理が訪れました。そして実務的には伯母さんがずうっと前からその準備をしてくれており、手際よく彼女にどうするのかを教えてくれたとおりにしたわけで、特に戸惑うことはありませんでした。しかしながら、この時期に、或る日セッションに訪れた彼女の指には包帯が巻かれてありました。そして彼女は学校のトイレの扉に指を挟んだと報告しました。血は出たのですが、全然痛みはなかったとのことでした。そしてこの折、彼女は2個のプラスチックボトルを自分の鞆のなかに入れて持ち歩いておりました。どちらも空っぽなのですが・・。これはどういう意味なのでしょう？それは

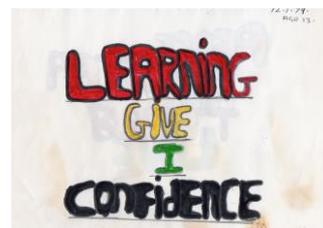
象徴的に彼女のこころの中で彼女が随分昔に奪い取ろうとした「母親オツパイ」なのか。それとも母親との競争意識から憧れたところの「父親ペニス」なのか、いずれでしょうか？

実際のところ彼女は身体的にめざましく成長しておりました。彼女はいつもわたしを亡くなった母親と重ねて見ていたようです。それはわたしが小柄であり、そして肌の色からしても母親に似ていたからなのですが。〈あんなにママそっくりなひと、これまで見たことないわ〉というのが、わたしに最初に会ったときの彼女の印象でしたから…。でもここ最近のこと、彼女はぐんぐん伸びて、実際わたしの背丈を追い越しておりました。それは彼女にとって‘罪悪’を意味したのでしょうか？そんなことをわたしは思っておりました。

彼女は1978年の9月末に女子校へ転校しました。その理由というのは、たぶん彼女は男の子との間での‘性的な’な意味合いを含む追いかけてこには飽き飽きしていたということが考えられます。もう十分に彼女はトラブルに遭っていたのですし。これ以上何をしでかすか分からない、自分をこれ以上信じられないということでしょう。やばい目に遭うのを未然に防ぐといった思いだったようです。おそらくは彼女は自分の内側に母親そっくりの‘男とナイフで渡り合うような気性の激しいアバズレ’を見たのでしょう(！)。言うなれば母親の二の舞になることを彼女は恐れたのです。それは正しい判断でしたでしょう。新しい女子だけの学校で、彼女はやっと心の平安を取り戻したのです。また彼女は自分についてもっとまじめなイメージを求めて、努力をし始めました。しかしながら、見方を変えれば、新しい制服に身を包んだ彼女は、まるで‘拘束衣’を着せられたふうであり、いかにも窮屈で、感情が抑制的にも見受けられたわけなのですが…。

1978年10月に、わたしは1年以内に退職することを彼女に告げました。彼女はしばらく黙ったまま涙しておりました。彼女は茫然自失したようです。愛情を求めるのに躍起になっていて、彼女は死んだ母親の墓の中に自らを生き埋めにせんばかりでありました。恰も死こそが二人の絆を切り離さないといったふうに…。本当にこれが彼女の探し求める「永遠の愛」ということなのでしょう。この後、セッションに戻ってきましたところ、彼女の腕には包帯が巻かれてありました。〈(感覚が)麻痺して動かなくなった〉と彼女は言うのです。彼女はぼんやりと臍抜けたふうでした。服装からしていかにも薄汚れて、全然ばらばらな印象なのです。恰も彼女は自分の‘暗い妄想’にひたすら埋没してしまっているかのようでした。そしてここで彼女は「自慰(行為及び空想)」をなんとか止めようとする努力が見受けられました。彼女はセッションの間に長い爪をマニキュア用のナイフで磨いておりました。彼女が言うにはくこうすれば、爪を噛むのを止められるから…>ということでした。どうやら彼女の心のなかでは、「爪＝乳首＝ペニス」、「口＝ヴァギナ」という象徴的等式があったように見受けられます。それら異なる二つのものが‘出会う’とは、つまり‘性交’という意味になるわけですが、それはその一方のどちらか、もしくは両方に粗暴かつ残忍な破壊をもたらすといったことであります。そしてこの時期、彼女はしばしばセッションを欠席しております。とくにクリスマス休暇が近づく頃には…。

休暇から戻ってきたパトリシアはいくらか冷静を取り戻したようでした。今や真面目に将来のこと、つまり職業選択を考えているようでした。実は、彼女はクリスマスの時期に従姉を訪問したのです。そこで幸せな結婚というもの、良い夫といったイメージを掴んだようでした。そして将来自分自身の子どもたちを持つことだって考えられなくもないと思われ始めた



のです。彼女は旅客機のエアホステスになりたいと野心を抱きました。そして「Learning give I confidence (学習することはわたしに自信をつける)」と紙に綴りました(図例; 1979/01/12)。まるで決意表明みたいに…。自信とはどういうことかという、例えば旅客機が墜落した場合、彼女は冷静さを保ち、賢明にも搭乗しているお客さまを正しく誘導し、救助するといったことです。それから、彼女は彼女の値打ち self-value というものを、有能性 efficiency、もしくは繁殖能力 fertility (身体的にだけでなく、思考面においても…)といったことをあれこれ見積もり始めたわけです。果たしてそれらが自分にはどのくらいあるものかと…。彼女は自分が将来一家の稼ぎ手にならなくてはならないということに強く意識しておりました。彼女は今や全面的に此の点に気持ちを専念させ、それ以外の社会的な愉しみなどは一切否定しております。もはや将来結婚するといったことさえも断念しているふうで…。彼女は或る信仰グループから強いサポートを得たようで、それが彼女の生活面に数限りない制約を課したのです。それでも彼女は、決して彼女を忘れ給うことのない「神さま」を見出したようであります。それは彼女にとって大いに慰めでありました。確かに死後の世界というものもあると考え始めておりました。以前に比べればそれもずっと迫害的な色合いは薄れております。ここでわたしに初めて亡くなった母親の9回忌になるということを語っております。そして彼女が「Blackshaw Road Cemetery」(病院のごく近くの墓地!)に葬られているという事実をも明かしました(1979/03/23)。彼女は学校で「母の日」に綴った文章を持参してわたしに見せてくれました。それは「母親はわたしたちをどう見ているか」ということに関係したものだと言いました。驚くべきことに、そこには家族それぞれの子どもに対して、思いやりやいたわりやら、情愛に溢れ、しかも極めて的確な描写でもって母親の想いが綴られていたのです。それは母親(もしくは伯母さん)が彼女のころのなかでは子どもそれぞれに対してハート(こころ)を持っているといったこと、常にそのまなざしは見守ってくれているといったことを証しておりました。そして同時に彼女は彼女なりにユニークな存在であるということ意識し始めます。例えば彼女は買い物に行くのが好きだし、それで自分の服をいろいろと自分で選ぶのが好きだということ、もはや亡くなった母親の古着は小さくてダメですし、伯母さんが買い与えてくれるものだけに頼るのも厭なのです。真実彼女はこころのうちでわたし(Miss Yamagami)から独り立ちすること、つまりセッションの終了ということを見据えて、それにしっかり取り組み始めたといえましょう。

その一方で、彼女は自己認識 self-awareness が育ち始めておりました。彼女自身について書いた文章には「もっと女性らしくなること…トラブルに遭ってもしっかりと直面し、決して逃げないこと…」というのがありました。それに加えて彼女が自分について語ったことは、<わたし、以前よりも思慮分別が付いてきたと思うの(I've got more sense than before)…>といったことです。彼女は将来についていろいろと考えを廻らせます。学校で進路指導(career-teacher)の先生からいろいろと助言を

いただいたようです。彼女はカレッジに行くことを考えます。歴史を学びたいと思っているんだとか。‘過去’にいろいろ興味があるんだとか。そしてその先、歴史の先生になるか或いは博物館で秘書をするといったことなんだそうです。ここでわたしが思いましたことは、彼女は意識的には自覚はないにしろ、「過去」を保存し、そしてそこから得た知識を存分に活用することによって、たぶん「未来」を築く(もしくは建て直す)といった彼女の願望が象徴的に語られているということです。彼女のこころのなかで一つははっきり決意していることがありました。いつか将来家族皆でジャマイカに戻って、そこで永住することを予定しているのですが、その地に根付いて、コミュニティのなかで自分が有能なメンバーの一員になることであります。

5週間の夏の休暇明けに彼女は遅刻してセッションに戻ってまいりました。彼女は喘息が出て、それで学校からもしばらく休んでいたことを報告します。彼女は言うなれば‘母子家庭’、つまり病気の子どもを抱えて疲れきった母親といったふうに、外界のいかなる援助(もしくは夫)もなしに一人孤立したままで途方に暮れている感じなのです。彼女はぼんやりと臍抜けたふうでした。気持ちが沈んで内側に閉じこもっており、抑うつ的に見えました。それこそがわたしが最も懸念していたことなのです。つまり彼女のこころのなかには、「ほどほどに良い母親 good-enough mother」ともいうべき頼り手が誰もいないということです。またこのことは、パトリシアを大きなお姉ちゃん(もしくは母親)として大いに必要としている幼い弟妹たちの世話をしているときに、得てしてこんな具合に彼女がなりがちといったことを示してもおきまずでしょう。

そして、われわれが別れる2週間前のこと、待合室にいた彼女は、セッションの時間になるのに双子の妹たちがまだ来てないとやらで大慌てで外へ飛び出してゆきます。わたしは何が何だかわからないままに待ちぼうけを食らっていたのですが・・。後で聞いたところでは、学校を終えてからセント・ジョージ病院で待ち合わせすることになっていたのですが、道順を教えてあったのにも関わらず、どうやら彼女らは病院への途がわからず、それで迷子になっていたようです。路上でうろろしている彼女らをどうにか見つけた時には既に私とのセッションの終了時間は越えてしまっておりました。というわけで、そこで改めてパトリシアは長女として幼い妹らに対しての責任感やら、自分が彼女らをいたわってあげなくてはといった自覚が俄然湧いてきたといえましょう。それでわたしとのセッションが犠牲になったわけではありますが・・。

彼女は自分の家族を一つにまとめてゆこうと懸命となることで、責任のある、信頼されてよい自分というものを育てているように思えました。そして学校ではどうにかいい成績を維持してゆけているようです。彼女が持参してきたノートブックには彼女がひじょうによく頑張っているようすがうかがえましたし、そこそこ有能であるようすですし、勉強もきちんとして丁寧にやれているようすです。今や彼女は14歳2か月になっておりました。彼女はここ一年の間にセカンダリースクールの修了試験にあたる「O レベル」を受験する心づもりようであります。そこでいい成績を取ることがカレッジ進学を決め手となるわけなのです。かくしてパトリシアの<選ばれた私>へ向けての将来の道筋が定まってゆくようでありました。彼女は、わたしとのセッションの最後の瞬間、わたしに向けて大きな笑顔を見せ<有難うございました>と言い、

そしてくさよなら>の言葉とともに歩み去ってゆきました。幾らか痛みを心のうちに抱えながら、でも何かしら解き放たれたといった晴れ晴れとした感じでした。こうして3年9か月間の治療を終えて、パトリシアは巣立っていったのです。

Chizuko Yamagami  
(Child Psychotherapist)

\*\*\*\*\*

■ 後記 — 「<sup>もと</sup>生きられる現実」を求めて —

わたしたちクライン派というのは伝統的に「内的現実 inner reality」を重視する。内的現実偏重主義といってもいいほどのだ。それは遡ればメラニー・クラインそして Mrs.Esther Bick の流れだが、かつて「タヴィストック」でのチャイルドサイコセラピスト養成コースの指導要領をめぐって、Dr.John Bowlby の子どもそれぞれの「外的現実 outer reality」をも重視しようとする態度と相容れず、Mrs.Esther Bick が「タヴィストック」を追われたことはよく知られている。そこでの論議は今尚も決着が付いていないような気がする。Mrs.Bick に追隨する人たちは「内的現実」に憑かれたひとたちとも言えなくもない。その勇猛果敢さは大いに敬服する。わたし個人としては、それぞれの「内的現実」が独自の固有性を有することは疑われないし、それが「外的現実」とも厳然と一線を画するといったことも・・。だが、実際のところ「解釈する」という分析家の行為は、飽くまでも患者の「生きてる現実」に寄り添うことだとしたら、だからこそ「転移解釈」なのだろうし、そこでクライン派が概して患者それぞれの「外的現実」を埒外に置く傾向があることに偏狭であるとの批判の声があるのもっともに感じる。ここでわれわれの姿勢において、「外的現実」に向けて拓かれてあるということが問われよう。

さて、「症例パトリシア」だが、「資料その3」に載せたソーシャルワーカーの書簡のなかに‘非現実的 unrealistic’とか‘現実的 realistic’とかの言葉があったが、わたしは一瞬気持が躓き、混乱を覚えた。「外的現実」そして「内的現実」、そのうえに「非現実」までもわれわれは生きているといったことになる！ 実際のところ、彼らパトリシアを取り巻く当事者たちのそれぞれの現実はまだ絡み合った糸玉のようだ。あまりにも錯綜していて、手の施しようがない。ソーシャルワーカーの<もうお手上げ！>の弱音が漏れ聞こえてくるような・・。

何が「現実」というならば、父親が幼い子どもらに情愛を注ぎ慈しんだことも、服役後戻ってきて子どもらに自分は妻を愛していたと言ったというのも、それは彼の現実だろうし、だからなんで俺がこんな目に遭うのかと自己憐憫に浸り、あいつのせいだと亡き妻を恨むとしてもそれも彼の現実・・・。母親が父親の皮膚の色の黒いのが気に入らず、それにいつも金銭面で諍いが絶えず、隙あらば他の男と出奔しようとしていた。それも彼女の現実だし。父親に向けてナイフをちらつかせて脅すような気性の激しさがあったとして、それは日常茶飯事のこと。たまたまナイフが父親の手のひらに切り傷を負わせたことで彼が激昂し、二階の窓から飛び降りてそのまま身動きできずにいた彼女を追って来た彼が刺したと

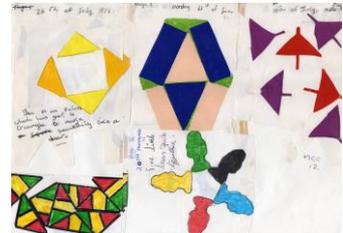
というのがこの真相だとしたら、どっちがどっちともいえない。それも母親が男と駆け落ちを画策しているのを盗み聞きしたパオリアがそれを父親に告げろし、それが事件の発端だとしたら、こうなるべくしてなったとも言えなくもないわけで・・・それでパトリシアが罪悪感を抱いたとしても、それは彼女の現実。そもそも日頃から母親が男の子を鼻屑して、お父さん子のパトリシアを邪険に扱った。そうであれば彼女が死んでくれてよかったとパトリシアが思うとしても、それも彼女の現実・・・。また伯母の Mrs.P にしても、下の子どもらを貰いたがっていたのに、母親がパトリシアはいいけど、下の三人の幼児たちはジャマイカにいる父親に預けたいと言って拒んだのを恨んでいた。だから結局のところ子どもらが全員彼女のものになり、それで幾らか罪悪感があり、その罪滅ぼしに懸命に福祉局に掛け合っ、子どもらのために支給される金を目一杯がめつく‘せびりたかり’をしたのであったとしたら、それも彼女の現実・・・。

それらすべてが現実だ。何一つ非現実ではない。が、どうにも交わらない。それぞれがそこ止まりのどん詰まりなのだ。まったくのところ思考停止。気持ちを言葉にするなどは大いにまごつくばかり。パトリシアがかつてこんなことを語っていた。<何かしら思いついても、どう言えばいいのか忘れてしまうの。それってまるで誰かがそれらをわたしの頭からすっきり取り去ってしまうみたい・・・> (1977/01/29)。それからまた、<わたしって、ただぼんやりと夢見てるみたいなのね。夢見てる時って、どんなことを考えているかって分かんないでしょ・・・>とも (1977/07/15)。<責任持てません、記憶にございません>というわけか？ 確かに家族それぞれの気持ちを忖度すれば、何も言えなくなる。「沈黙は金、言わぬが花」ではないか。というか、「口は災いのもと」ということでもあろう。わたしが何か尋ねても、<わたし、何も考えてなどいないわ ( I am not thinking anything )・・・>と答える。そんなふうの時をやり過ごしている。誰のための、何のためのわたしなのか、解らないということだろう。それがパトリシアになる。

ここに一枚の絵がある (1976/05/10&17)。そこには家と二人の女の子が描かれており、左上の端にはコンコルド(超音速旅客機)が描かれてある。右端には、説明書きがあり「飛行機が空を飛んでいる。二人の女の子らが家の窓から空を見上げている」と書かれてある。最初にまず彼女は手前の女の子を描いていた。これから外出するところで、友達に会うか、もしくはパーティにゆくところ。鳥の図柄のあるシャツに、鯨が氷の上でスケートをしている図柄のあるスカートを履いている！(そうした図柄のスカートを以前履いていた、と彼女は語る。)それから彼女は家を描いて、その二階から花壇の花を見ているもう一人の女の子を描いた。水遣りをしなければ、涸れてしまうと思っている。確かにここに描かれてある花は、いかにもパトリシアの心のように虚ろで色がない！ただそれを眺めているだけ。そして結局のところ何も為し得ず、心はずっと遠くの空を飛ぶコンコルドを追いかけている。確かにこれが「時をやり過ごす」ということ。地に足が着かない。いつか、どこかで・・・とぼんやり夢見てるだけ・・・。



ここで「症例パトリシア」を振り返ってみるに、どうにも「内的現実」の探求といったことにはほど遠い。不徹底は否めない。長い間、セッションはいかにも‘時間潰し’に使われているといった感があった。ワードパズルでことばを継ぎ接ぎしてみたり、形 shape をあれこれ切り抜いて貼り付け、いろいろなパターンを作ったり、算数の宿題と言って数を足したり引いたり、延々と・・・(図例; 1976/06/21)。それらに意味を見出すのは困難だという気がした。でもどうやら何やら彼女の意気込みは伝わってきた。そしてふと思う。それは子どものブロック遊びにも似ている。数、形そして語といった‘要素’を組み合わせ、彼女なりに「世界」を再構築(再構成)することに挑んでいたのではないか。クライン派的に言えば、「母親の胎内(内側 inside)」の修復であろうか?! この彼女の‘時間潰し’ならぬ‘時間稼ぎ’が何に繋がるのかと見守った。その成果の一つと思われるのは、彼女が精力的に粘土やら小さな動物などを使って農場経営のアイデアを次から次へと拵げていったこと(1977/01/22~02/04)。牛やら豚さんそれにカンガルーそれぞれが家族ごとに敷地内に飼われている。獰猛なライオンの家族たちは別の柵の中! 水場もあり、そこへ至る道には頑丈な橋が架かっていた。その水場にはアヒルさんたちもいて、樹木が茂っている。広々とした牧草地が拵がり、生命に溢れていた。男女がそれぞれ馬に乗って農場の見回りをしていた。そしてそこには「The B\*\* Farm (B家の農場)」と誇らしげにパトリシアのファミリーネームの付いた看板も! 言うなれば、これこそがクライン派の「良き結合両親像」の実現化でありましょう。珍しくも晴れやかな顔で彼女は、<こうしたいと思っていたことがようやく出来た(I've done something I quite wanted to)・・・>と満足げに語った。これでやっと片付いたと言わんばかり・・・。父親が戻ってきたこと(1977/01/13)で一気に夢が膨らんだ。やがてそれも無惨に打ち砕かれるのであるが・・・。



それでセッションはどんな具合かという、ちょっと驚いたのは彼女が月々のセッションの回数を表にした「My Marking Book 1976-77」及び「Date Book 1977-78」(図例)である。彼女は丁寧に月々のセッションの振り返りをしている。そこには「遅刻した、欠席した、ひどく遅れた、病気で休んだ、早めに着いた」などの記述があった。遅刻が何回で欠席が何回と総括し、そして「もっともっと早く来るようにしなく

The times I've been here			
I have been here 38 times			
June	July	August	
times 3	4	5	
September	October	November	
times 5	5	4	
December	January	February	
times 6	4	4	
March	April	May	
times 4	5	4	
June	July	August	
times 4	4	4	
September	October	November	
times 4	4	4	

I will be bringing up in 1st April.  
The ~~last~~ time I came here will be the 1st of April and coming back the 15th of April.  
1st of April  
It is the 1st of April and it is April's Fool day.  
1st of April  
I have been coming here late ~~and~~ (and did not come) 17 times I must try and come much, much earlier.

ちゃ・・・」とか反省文が書かれているから面白い。実に彼女は、わたしに会いに来ることにすごいエネルギーを消耗させていた。可哀想なほどに・・・。確かに遅刻は頻繁だった。時間終了間際に駆け込んでくることもよくあった。その言い訳はさまざまで、財布をどこかに置き忘れて、それで校長先生と一緒に探してくれたとか、手の中で握っていたバス賃を落としてしまっ、それでバスに乗れなくて歩いてきたから遅れたとか・・・いろ

いろ。彼女にしてみれば、待っているわたし(Miss Yamagami)を確認できればそれで良かったのだ。「待たれている、そして見捨てられていない」ということ、それこそが彼女には意味のあることだったろう。ここに自分の居場所があるということ。心は上の空で、別のどこか遠くに飛んでいたとしても…。わたしの語ることが時折チンプンカンブンであろうとも…。彼女は時折母親が夢に現れ、彼女の首を絞めようとするといったことにも悩まされていた。そうした彼女にしてみれば、わたしと一緒に場所が彼女にとって確かな‘現実’であった。それがなくなるとはいないということ、それだけを確認することだけでも気持ちは精一杯だったろう。それを確認しに来るだけでも怖くてたまらないのは本当だったろう。言うなれば、隠れんぼ(hide and seek game)みたいに…。「いないいないばあー」をやっていた。内心は怖くて怖くて…。わたしが姿を現すまでは気が気ではなかった。それが見て取れた。

それに、伯母さんから彼女のためカレッジに進学するために貯蓄してあると告げられている。あなたにはそれだけの頭脳があるんだからと…。だからとにもかくにも伯母さんの言うことに従うしかなかった。＜わたしがここに来たくないと言っても、伯母さんが行かなくちゃと言うから…＞と言いながら、でもパトリアは内心満更でもなかった、とわたしは思う。受付の美人秘書ジーンは優しい笑みで迎えてくれたし、廊下で会うドクターたちは品のいい英国紳士で時折ハローと声を掛けられることもあったりして、彼女はこの人たちのようにいつか選ばれた人になりたいと密かに思っていたに違いない。将来タイプストになると彼女が言っていたわけだが、それもジーンに憧れたせいかな。それも有り得る。「病院」はカレッジへの道につながってもいたのだ。

だから父親が登場し、わたしに面会を求めた時、彼女はひどく怯えた。治療が打ち切られることを内心恐れていた。父親は刑務所で精神科医に面談したことが自分のためになったと語っていたわけだから、わたしとしてはいくらか期待するところがあったが、やはりパトリアの案じていたとおりで、面談(1977/02/16)に現れた彼は開口一番、わたしに＜パトリアに問題は見当たらない。何もここで治療は必要ない…＞とのことだった。ただ、かつて抑うつ的で宙を見据えていた彼女がいくらか明るくなったとは認めた。家を留守にしていた間、パトリアへの実姉の影響力が増していることに彼は焦っていた。僻んでもいいだろう。父親の活券こけんに関わる、だから＜おまえらの勝手にさせないぞ＞というのがあったろう。それからいろいろと彼女の幼少時の頃についてあれこれ昔語りするなかで、どんなに彼女が父親に懐なついていたかを大いに自慢した。そしてやがて父親としてのプライドを刺激されたのだろう。彼は6か月ほど前にパトリアが彼に＜わたし結婚はしない。ママに起きたことは自分にも起こるから…＞と言ったとかで、それで内心狼狽したことをわたしに吐露した。こうして初めて彼はわたしにパトリアについての懸念を表明したのだった。現実と空想とがどうやら混乱している向きがうかがわれる。整理してゆくことが必要で、おそらく治療の継続の意味があらうと示唆すると、彼はその旨了解した。パトリアは深く安堵した。だが、治療が打ち切りになるという可能性を目の前にして、改めてこの人に自分を預けられない、任せられないという気持ちがパトリアのなかで強まったと思われる。もはや父親の介入を喜ばないということ。彼の帰宅以来、伯母夫婦と彼の間で何やら不穏な空気を嗅いでいたのも事実だ。今や彼女は分別(sense)を求めた。＜水槽の金魚は薄汚れた水の中では死ぬ。だから水

を取り換えなくちゃ・・>と彼女は言っている(1977/01/04)。これは違う！このままは厭だ！と声を上げたのであった。現実の父親に違和感を覚えたに違いない。そしてもはや昔と同じではない自分もまた意識されたのであろう。父親からの離反、それは苦渋の選択でもあり、セッションも荒れた。<I'm not thinking anything(何も考えていないわ)・・>と彼女はつつけんどんに言う。口の中でポテトチップスやらピーナッツをかじりながら、時には傍らにテープレコーダーを置いて音楽を流しながら・・。雑音ですべて消し去ろうとするかのように・・(1977/06/03)。内的現実を徹底して掘り下げることには無理のようだった。スペイン語の勉強を始めたと言っていたが、あれは何なんだっただろうか。セッションに歴史の本を持参し、それを読んだり、何かを尋ねても間髪入れずにく何も(Nothing)・・>としか返ってこない。彼女は「教会」で洗礼を受けるという話しをしていた。それで父親に会いに行ったとか。父親を憎んでいるかぎり洗礼は受けられないから・・と彼女は説明した。<彼の人生は彼の人生だから・・>、と割り切った言い方もしていた。わたしは彼女に、日本に帰国後わたしの住所を知らせると約束した。<そんなこと、考えもしなかった・・>と、彼女は信じられないふうな顔をしてボソッと言い、そうか、すべてが終わりではない、続きがあるということで安堵が戻ったようだった。だが、終わりは終わりである。彼女の「外的現実」についてわたしの立場では今一つ解らないことがありすぎたともいえるが、どうやら学校での成績に彼女は気が奪われていた。ここで猛然とカレッジにゆく夢の実現へと舵を取った彼女がいる。「歴史」を学びたいと彼女は語った。‘過去’に関心があるのだと言う彼女にわたしは目を瞠った。自分の立ち位置が定まった彼女は、それなりにブラボー！であった。

そしてここでわたしは、結局この治療において彼女とともにわたしに何ができたのかを問うたとき、それはエディプス葛藤に色濃く彩られた彼女の「内的現実」の掘り下げでももはやない、親たちそして親族との因縁絡みの「外的現実」を解きほぐすことでもない。それらとも違う別の何か、すなわちパトリシアが独自に「生きられる現実」というものをこの間一緒に模索してきたと言えるのではなからうかと思う。彼女の本質に根差した、彼女にとって「生きられる現実」、おそらくそれだろう！それを深く自覚することが出来たとしたら、彼女もまた一人の「分析の子ども」と言っているのではないか。そうわたしには思えた。

伯母である Mrs.P は時折面談を続けていたソーシャルワーカーのトニーに、<いろいろあったけれど、でもほんとうに子どもたちは健やかに育ってくれた。ほんとうに可愛い子どもたち(lovely children)だ・・>と語ったらしい。彼女のこれまでの苦労が報われている。そう彼女が思えること、それこそが掛け替えのない、何よりも尊い‘現実’であろう。さて、これからパトリシアがどのように彼女に報いるのかが問われてゆく。彼女は「分析の子ども」であり、「教会の子ども」であり、それに何と言っても「ソーシャルサーヴィスの子ども」だと、わたしは思う。彼女はイギリスの地で多くの人たちに生かされてきた。いつかその恩義に報いるであろうことをぜひとも彼女に期待したい。(2018/02/27 記)